

Ruhe (ルーエ やすらぎ)

März 2013

29

The German House in Naruto

発行日 2013年3月25日
発行 鳴門市ドイツ館
編集 川上三郎
〒779-0225
鳴門市大麻町松字東山田55-2
TEL:088 689 0099 FAX:088 689 0909
URL: http://www.city.naruto.lg.jp/germanhouse/
e-mail: doitungan@city.naruto.lg.jp

第19回リューネブルク市親善使節団からの記念品

前号で鳴門市の姉妹都市であるリューネブルク市からの親善使節団についてお伝えしましたが、その際に同市の独日協会から鳴門市日独友好協会にいただいた記念品が、このたび鳴門市ドイツ館に寄託されましたので、その紹介をしたいと思います。

これらは、第26号で「チターと歌のコンサート」というタイトルでご紹介したチターの製作者である青野原収容所元捕虜ルドルフ・ユングの遺品の数々で、前回と同様にその孫のヴィルヘルム・フェンスター氏からいただいたものです。前回はチターのほか、収容所で作成、使用していた楽譜を2冊いただきましたが、鳴門にはチターの楽譜がほとんど無いことを知られたフェンスター氏が遺品の中からたくさんの楽譜をまとめてリューネブルク市独日協会のゲバル会長に託されたとのことです。

その楽譜ですが、全部で29点、大部分市販品で、1ページから4ページのチター演奏曲の楽譜です。ドイツ南部からオーストリアにかけての民謡風の曲目が多いように感じました。楽譜の多くは1920年代のものようです。中には1920年代に発刊されていた「Hausmusik」(家庭音楽)という雑誌に収められた曲もあります。これら単独曲のほかに3冊の曲集があって、2冊はチター演奏用ですが、1冊だけ「男声四部合唱曲集」というものがありました。

あと1枚、謄写版印刷のような「Nachruf」(追悼)というタイトルの楽譜があって、ルドルフ・ユングの作詞作曲になるものです。彼がただ単に演奏するばかりでなく、曲を作ることに楽しみを見出していたことが知られます。

楽譜以外に、兄弟から青野原のルドルフにあてて出されたハガキと次の3品(いずれも捕虜時代に使われたものと伝えられています)が寄贈されました。

バリカン: ゲンス社(ゾーリングゲン)、外箱つきです。

料理ナイフ: Fr.v.d.コーレン社(ゾーリングゲン)、ROSTFREI(ステンレス)と刻印。

食事用ナイフ: IM&C社(ゾーリングゲン)、鋳鋼製。



これまでもリューネブルクからは数々の記念品が贈られ、中には今回のようにドイツ兵捕虜の遺品があって、それらは当館の貴重な歴史資料の一部になっています。本当にありがたいことです。

ドイツ館イベントの紹介

第19回ドイチェス・フェスト in なんと

例年のように、昨年10月28日(日)に「ドイチェス・フェスト in なんと」が開催されました。午前中のあやしかった天気も午後には日も差すようになり、ドイツ館前広場でのイベントが滞りなく開催され、多くのお客様を迎えることができました。いつものことながら、ドイツ館前の駐車場は満杯で、少し遠い場所に駐車をお願いするほどでした。

さて、前回はドイツからの出演者としてヴォルフスブルクの古典舞踊団をお招きしましたが、今回はベルリンからピアニストのウルリーケ・ハーゲさんです。この時期、ちょうど京都のヴィラ・鴨川(ゲーテ・インスティトゥート)のアーティスト・イン・レジデンスに滞在中なので、出演をお願いしたのです。

午前と午後の2回、通常のピアノ演奏だけでなく、コン



ピュータ音源と合せたり、ピアノにさまざまな小物をはさみこむなどして風変りな音を出したり、はたまたピアノを打楽器のように叩くなど、独特の音楽を響かせ、聴衆を魅了していました。一方、ハーゲさんご自身はドイツ館と鳴門の美しい自然を気に入ってもらえたようです。



演奏するハーゲさん

「世界の踊りフェスティバル」

これは昨年11月24日（土）、第27回国民文化祭の一環として徳島県で開催された同名イベントで県を訪れたニーダーザクセン州の音楽グループと舞踊団にドイツ館にも足を運んでもらい、開催したものです。

音楽グループは「デ・フォフティグ・ペンス」というヒップホップバンドの3人で、大きな特徴は電子音楽を使い、標準ドイツ語ではなく、出身地の北ドイツの方言である低地ドイツ語で歌うことです。聴衆には年配の方もいたのですが、全員彼等の音楽の熱気にすっかりはまりこんでいました。ことばは分らなくても、身体全体に感じるものがあってのでしょうね。



デ・フォフティグ・ペンス

もう一方の「アマーランド民族舞踊団ハンス・リュアス」は総勢男女合わせて20人のグループで、いろいろな楽しい伝統的な民族舞踊を披露してくれました。中には写真のように男性2人が軸になって女性2人を振り回すような大技も見せ、観衆からはびっくりしたような歓声があがっていました。ダンスの終了後は舞踊団からの誘いかけで観衆も加わって交流が行われ、ダンスの基本を教えてもらったり、木靴を履いてステップを踏むなど十分に楽しんでいる様子うかがえました。



アマーランド民族舞踊団



観客と手をつなぐアマーランド民族舞踊団

特別展示「鳴門市ドイツ館の所蔵品と寄託品展」

今年の1月20日（日）から2月24日（日）まで、タイトルのような特別展示が催されました。

当館2階の常設展で展示されているのは、書籍、印刷物を中心として、他に家具、小物類、手紙など数々の品々がおよそ160点近くあります。しかし当館に収蔵されている品々はこれだけにとどまるわけではなく、ふだん展示されていないものも多数にのぼります。それは、主にスペース上の問題あるいは展示品損傷をできるだけ少なくしたいといった理由からなのですが、展示品の差替えなどの対応では公開できる点数に限られます。そこで今回保管されているものをできるだけ多く公開し、皆様に見ていただくという趣旨でこの特別展示を企画したのでした。中には旧ドイツ館以来20年ぶりに展示されたものもありました。

ここで展示された物品は、2011年3月発行の「鳴門市ドイツ館所蔵品目録」（インターネットで閲覧できます <http://www.dt-haus.org/publ/catalog.html>）に記載されているものが多いのですが、記載漏れの品や個人所有のものもありますので、以下にその主なものを紹介しておきます。

- 元捕虜ヘルマン・ハーケの母への手紙とはがき、3点。全部で120点以上あるうちの一部。
- 捕虜が描いた収容所の看護兵と警備警察官の肖像画2点
- 阿波踊り絵はがき16枚：大正時代の阿波踊りの写真で、元捕虜クルト・マイスナーが所持していたもの
- 第一世界大戦中から大戦後にかけてのドイツ緊急紙幣と高



額紙幣122枚

○ Täglicher Telegrammdienst Bando「日刊電報通信」1917年7月11日付。板東収容所の新聞としては『ディ・バラック』が有名ですが、これは週刊（後に月刊）でした。それに対し、こちらは日本語や英字新聞の記事の翻訳や収容所内の伝言、依頼、宣伝などを掲載する日刊新聞でした。

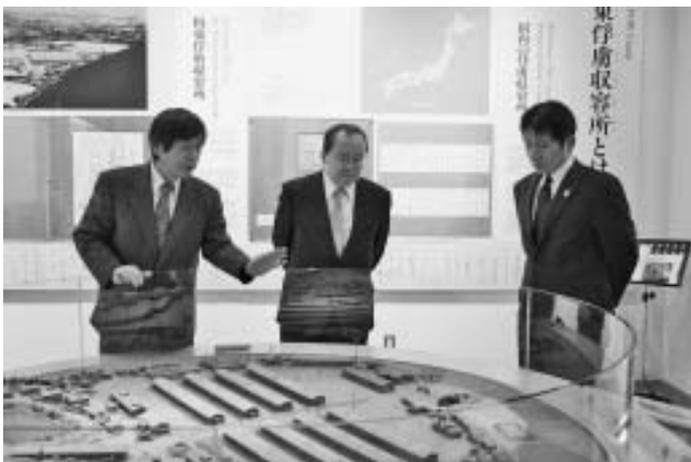
○ 50 Jahre – ein Traum「五十年の夢」：元捕虜ヨハネス・バートの写真付き四国旅行記。バートが1968（昭和43）年5月にかつて捕虜として生活した丸亀、板東ほか四国各地をめぐり、その土地の人達との交流を描いた日記です。ドイツ語版もありますが、ドイツ館が所蔵するのは日本語で書かれた方です。

その他のイベントは今号末尾にまとめています。

ドイツ駐在中根大使の来館

2009年2月に神余前ドイツ駐在大使が来館されましたが、今年の2月21日（木）には昨年ドイツ駐在大使になった中根猛氏が来られました。実はこの正月にプライベートでいらしていたとのことで、2度目の来館になるのだそうです。泉理彦鳴門市長をはじめとする鳴門市側との面談では、鳴門市とリュネブルク市とのほぼ40年にわたる親善交流が話題の中心となりました。ドイツとの交流での支援について好意的な発言をいただきました。また今年、鳴門市からの親善使節団がリュネブルクを訪問するのですが、大使にもそこでお会いできるかもしれません。

面談後、館内を案内、展示の説明をしつつ、また大使から質



説明を聞く中根大使（中央）と鳴門市長（右）

問などもありましたが、予定の時刻があっという間に過ぎて、ドイツとの交流のそもそもの発端や開催中の特別展示などを説明できなかったのは心残りでした。

韓国大使、来館

申珥秀（シン・ガクス）駐日韓国大使ご夫妻ほか、大使館と神戸総領事館から全部で8名の韓国外交官の方々がこの2月7日（木）に来館されました。これは大使が日韓の相互理解を深め、特に若い人を中心に人的交流を進めようと日本各地を訪問している一環だそうです。泉理彦鳴門市長をはじめとする鳴門市側との面談ではそれ以外に観光振興も話題となりました。この後、少ない時間内でしたが常設展示と特別展示をご案内しました。



申大使（左）と鳴門市長（右）との記念品交換

所蔵品紹介（古写真）

ドイツ館が所蔵する1900年代初期をはじめとする古い写真は原画、複写あわせて、かなりの枚数にのぼります。これらの写真のデジタル化は一応終わっていますが、この作業の対象とした写真は大多数、原画ではなくカメラ撮影による複写でした。元の写真が、ピンボケ、褪色などいろいろな理由で不鮮明なものもありますが、もともとカメラによる複製のため、拡大するとどうしてもピントが甘く、微細な点が良く分からないものが多かったのです。

現在、所蔵資料のデータベース作成の一環として、写真のデータベースも作成しているところです。まだ撮影日時、場所、人物やそれ以外のキーワードの入力はこれからで、作業が完了したとはとても言えない段階です。この作業の手始めとして、原画が存在するものについては改めて高精細度のスキャンを行いました。高精細にしても意味のない、もともとぼやけた写真もありますが、より鮮明になって写真を拡大表示すると細かい個所まで確認できるものがありました。たとえば次の写真は板東で開催された「俘虜製作品展覧会」の光景です。これまで、寺の大きな瓦屋根と手前の人々に注意が向き、幔幕の手前に演奏している楽団がいるとは想像していませんでしたが、拡大すると指揮棒を振る人（パウル・エンゲル）と演奏者の姿がはっきりと見えてきます。



展覧会会場、靈山寺境内

あるいは次の写真の撮影場所は、城の堀らしきものと路面電車も見えていることから、松山城の堀端だろうと見当はついていました。小さな写真では分かりませんが、左から2台目の路面電車の右上に停留所の名前を書いた看板があります。拡大表示すると、ぼんやりとはありますが、「西堀端停留場」と読めます。当時の松山市の地図を見ると、堀の南西角から少し北に進んだところに「にしほりはた」と書かれた電停がありますので、これで間違いなくこの写真は現在の松山市西堀端交差点付近から撮影されたものと言えるようになりました。

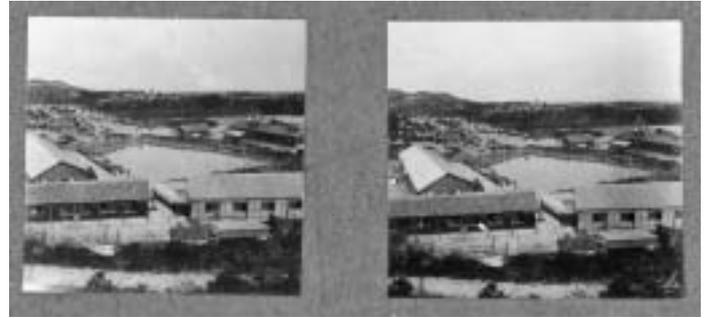


松山市内、お堀端の風景

次の写真は元捕虜エドゥアルト・ライポルト氏が寄贈したものです。最初からこのようなペアで台紙に貼られていました。これまで、何故同じような写真が2枚も並んで置かれているのか不思議に思ったものの、それ以上の考えは及びませんでした。ところが昨年末にある人から、ステレオカメラというものが当時からあったという話を聞かされ、はたしてこれは立体写真ではないかと気がついたのです。

左右の写真は一見同じ写真から左右少トリミングする場所を変えて焼付けた写真のように見えます。しかし画像編集ソフトを使い、双方の写真の中央遠景に写っている鉄条網の支柱を基準に重ね合せて表示してみると、微妙なずれが判明します。手前に行くほど左右のずれが大きくなるのです。

ちなみに、同種のペア写真がもうひとつありますが、この2つ以外これまで板東も含めて各地の収容所で撮影された各種の



板東俘虜収容所の立体写真

写真にこの類のものはなかったように思います。このような写真を見るには専用の立体視ビューアがあるようですが、一体どのように見えるのか興味を引かれるところです。

「青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究」第10号

ドイツ館に刊行会事務局が置かれ、印刷発行を行っているこの研究誌も第10号を数えるようになりました。これまで、日本全国のみならずイギリス、ドイツの研究者からも投稿をいただいています。鳴門市の地元にあたる板東俘虜収容所だけではなく、当時のドイツ・オーストリア兵捕虜と収容所に関する研究成果を発表する共通の場として貴重な研究誌であると自負しています。

購読あるいは投稿を希望される方は「青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究」ホームページ (<http://www.dt-haus.org/journal/>) をご覧ください。これまで発刊された本誌の創刊号から10号までの目次と投稿規定、投稿用のテンプレートを見ることができます。

ドイツ館で開催された主な行事

11月1日(木)～12月3日(月) 奥山実秋絵画展

11月18日 ドイツ館落語会

12月2日 ドイツ館友の会クリスマス会

12月9日 板東道生コンサート

1月1日(火)～14日(月) 前田博史写真展

2月24日(日) 第6回フリーデンスフェスト

2月26日(火)～3月21日(木) 第19回リューネブルク市親善使節団交流写真展

3月16日(土) ワークショップ「環境問題について考えよう！」
(講師：ロバート・テルシグ)

👁️ 編集後記

今冬はとても寒く、大雪に見舞われた地方があるかと思えば、3月に入っていっぺんに暖くなりました。ドイツ館周辺では3月10日過ぎには桜が咲き始めました。

今年は新ドイツ館竣工20周年にあたります。展示に関して、全面的な模様替えは無理でしょうが、せめてその後収集できた資料や新事実に基づく展示品や解説の変更、あるいは追加などができないか考えているところです。